

麻雀のエトセトラ

樋口 美恵子

荃崎(つくば市)にふれあいプラザが開館して早速に、研修室をお借りして七年が経ちます。

あつという間の七年間は、いろいろの出来事がございます。

ゲームの楽しみは、日を増す毎に上達は、その覚えの早いこと、また、忘れてしまう事も早いこと、一日千秋のおもいで、駆けつける時間は、多忙を、お仕事、体調を調整しての麻雀教室でした。

牌も見たことも無い、麻雀の名も知らない、各自、参加することの出会いも語りながらどうにか始めの一步の挨拶から始まりました。

配られた牌に、ある有名な著者は恋文のようだと申しています。

十三牌を、聴牌に、役になるか、あとの一牌で上がり、その難易度で得点も変わります。

四人で競う胸の動揺も心理作戦も加え展開します。

一つの捨て牌にがらりと替わるゲームです。

山あれば谷ありの、人生そのものに例えても過言ではありません。

初めて知る麻雀の奥の深さと、覚えきるまでの喜びは、いうまでもありません。

帰りがけにドアを出られる表情は、血色よく、明るい美しい笑顔があります。

以前は評価の低い麻雀が、今はブームになっています。脳の活性にいい健康方法であると認められ呆け防止に効果があると聞きます。

頑張りましょう。



健康麻雀・3ない麻雀
賭けない・飲まない・吸わない

荃身協に入会して

岩下 宏

今年(平成23年)4月に東京の小金井市から女房と二人でつくば市の宝陽台に引っ越してきた岩下です。75歳で全盲です。高齢でしかも障害を持っての転居は想像以上に過酷でした。

東京以外に住んだことのない私にとって、この地は全く未知の土地、一人では外に出られず、家の中でも迷う始末でした。

また埼玉県内の2箇所の勤務先に通うのも始めは大変でした。上野まで女房に送ってもらっていましたが、2ヶ月ぐらいたつと一人で行けるようになり、ほっとしました。

8月と9月には、荃身協の会合に出て、障害者の方と会うことができました。

子供や孫達、兄弟、大学の友人などが相次いで尋ねてきてくれました。

また近所の人たちとも知り合いになれ、時には牛久駅まで車で送ってもらったこともありました。そんなことで

徐々にこの地に落ち着いて住んでいこうという気持ちにやっとなれました。

ただ、障害者が利用できる制度をまだ殆ど利用できていないのが現状です。振り返ってみると、ベッチェット病という難病で視力障害となった35年前、東京でもガイドヘルパーや朗読ボランティアなどは存在しませんでした。

そこで数人の仲間を見つけて視力障害者の会や難病患者の会を作っている活動をし、やっとボランティアを育成したり、市当局に障害者にとってどんな施策が必要かを時間をかけて交渉し、幾つかの施策を実現させることができました。

障害者になった当時、周囲の人たちにとっても助けられなかったので、その恩返しのため、市の障害者相談員やオンブズマンなども引き受けてきました。また視覚障害者にとってパソコンが出来るかどうかは生活する上で大変な違いですので、長年自分で教えられる範囲で、パソコン教室を手伝ってきました。このことはそのうちに、つくば市や荃崎地区でもお手伝い

ができるのではないかと思っています。

現在やっている仕事は、一つは視覚障害者に必要な訓練をする施設の施設長と鍼灸学校の講師です。いずれもやり甲斐の有る仕事。続けるかどうか迷いましたが、通勤が一人でできるようになったので、もう少し続けることにしました。

そのため時間にゆとりがなく、地元で過ごす時間が無いのが悩みです。

現在私が切実に願っているのは、土日祭日にも利用できるガイドボランティアやガイドヘルパーです。周囲に知り合いが少ないので、是非皆様のお力を借りたいと思っております。よろしくお願いいたします。



ガイドヘルパーさんによる「かわら版」朗読に耳を傾ける岩下さん